

# 華嚴法藏の善知識觀

山 田 亮 賢

## 一

『華嚴經』は至るところに善知識を強調している。殊に「入法界品」は全體が善知識に親近することで貫ぬかれている。このような特徴は大乗經典中に於いても特殊な傾向を示すものと見ることが出来る。勿論、何れの經典も善知識は尊重せられているが、特に顯著な傾向がこの『華嚴經』に見られることは見逃し得ないものがある。従つてこの『經』に見られる「善知識」に關する主要な問題を指摘し、それがまた華嚴教學を代表する法藏によつて如何に問題とされ、理解されたかについて考察を試みようと思う。

善知識は善友、親友、善親友、勝友、眞友等と同義に用いられ、それは惡知識に對しての意味を持つものである。

『華嚴經』では善知識と善友が任意に用いられている。後世一般的には善知識は法の師、善友は法の友という意味に使用されているが、本來的には、法の師友である。従つて善知識と善友とは截然と區別する程の意味の差別はないのである。ただ時と場合によつて師の意味を持ち、また友の意味を示すにはかならない。

『華嚴經』は『大無量壽經』と相應するかの如き宿世を強く説く。その宿世について、直ちに善友を以てその歴史的背景を示している。このことは『華嚴經』に於いて極めて重要な意味を持つものである。この『經』において特に根本的立場とも言ひ得るものは、佛成道ということである。佛成道をこれ程意義深く特殊な表現を以て表わそうとした『經』は、他に類例を見ないと言つてよい。即ち『經』に言う「寂滅道場」が『經』の説かれる

根本であり、内容として如何に菩薩道が廣く説かれ、その展開が示されても、要は根本の「寂滅道場」の出發點に根を置くものと言える。それだけに最初の會座としての「寂滅道場會」は意味深いものがある。この道場に來會した菩薩は如何なる因縁を持つかということは、またこの『經』の依つて立つ背景を直ちに知らしめることにもなる。寂滅道場には、普賢菩薩を上首として、普德、智光等の諸大菩薩衆が來會し、その代表者の名を列ねた後<sup>①</sup>「與<sub>二</sub>如是<sub>一</sub>等諸菩薩俱。皆是盧舍那佛。宿世善友。」と説かれている。この『經』ではここにはじめて善友の語が見出される。しかも盧舍那佛の宿世の善友である。この大菩薩衆がこの地上の歴史的意義を持つ寂滅道場に來會したということは、そこに出現した盧舍那佛が如何なる佛であるかを知らしめる役割が、示されていることになる。盧舍那佛は單に地上の人としての人間釋迦ではない。人間釋迦を超えて永遠なる常住法身佛である。かかる盧舍那佛の出現を明かに示すためには、來會の菩薩衆の本性を示すことによつてすることが最も適當なのである。即ちこれらの大菩薩衆は、今ここに來集したことが、この世の單なる偶然の事實に止るのでなく、寧ろ萬劫にも遇い難いこの會座に、期せずして來會し得たこと

は、既に過去宿世の深い因縁が積集されてあつたればこそである。この本佛たる盧舍那佛が自ら過去世に於いて、曠劫の修因を積み、宿世の菩薩行を行じた時、今、現に參集した諸大菩薩衆がその善き友として、同行の甚深の因縁を結んでいたと説くのである。宿世の善友なればこそ、現在ここに來會し得る必然性があつたのである。この世の善友は既に久遠の過去世に於いて善友として成就されていたのである。このことからまたこの『經』の三世觀が表現されていることを知る。舊譯に見られる「宿世善友」の語はそのままの表現で新譯には見られないが、「如<sub>レ</sub>是等而爲<sub>二</sub>上首<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>十佛世界微塵數<sub>一</sub>。此諸菩薩。往昔皆與<sub>二</sub>毘盧遮那如來<sub>一</sub>。共集<sub>二</sub>善根<sub>一</sub>。修<sub>二</sub>菩薩行<sub>一</sub>。皆從<sub>二</sub>如來善根海<sub>一</sub>生。」と説き、往昔、如來と共に善根を集め、菩薩行を修し、皆、如來の善根海より生じたということは、直ちに宿世同行の善友であつたことを表したものと云つてよい。

このようにして本佛の宿世の善友が明らかにされたことによつて、それはこの『經』が將に説かれんとする當初に於いて、その背景の深さが表らわされたことにもなる。この『經』の構成は二部によつて成るが、最初の「寂滅道場會」に對應するものとして、後に「重閣講堂

會」が説かれているが、即ち「入法界品」に於いて、このことに關する所に、これらの諸菩薩は、皆悉く普賢行より出生したと説かれているを見る。新舊二譯共に同じく普賢行と言ひ、舊譯では「此諸菩薩。皆悉出生普賢之行。」また新譯では「……皆悉成就普賢行願。」と言つてゐる。「入法界品」は善財童子が一貫して求めた普賢行を説くにあるが、それはまたここでは既に宿世の善友が普賢行より出世したと言う。ここに普賢行が三世を貫くものであり、その行心等しきものが宿世の善友であることを知り得るのである。

法藏は『探玄記』卷第二に宿世の友について適切な解釋を與えている。佛德を顯す方法として、「如<sub>レ</sub>云<sub>下</sub>欲<sub>レ</sub>觀<sub>ニ</sub>其人<sub>ニ</sub>先觀<sub>ニ</sub>其友<sub>ニ</sub>等<sub>上</sub>」と言ひ、盧舍那佛の德はこの來會の諸菩薩衆によつて知らされることを明らかにし、更に善友の意味に言及し、「俗書云。同志曰<sub>レ</sub>友。此中善友有三義。一過<sub>レ</sub>己義如<sub>ニ</sub>善財追友<sub>ニ</sub>。二德齊義以<sub>ニ</sub>是朋友<sub>ニ</sub>故。三少劣義以<sub>ニ</sub>普賢等<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>第二尊導<sub>ニ</sub>故。」と説明を與えている。善友の三義こそはこの『經』中に見られる師友を具體的に擧げていることを知るのである。

## 二

宿世の善友が説かれたことは、そこに自ら過去、現在、未來の三世を貫いて善友の意義が示されていることを知る。従つてそれは「入法界品」に於いて新たに「親近善知識」が力説されることになる。親近善知識を具體的な求道過程に於いて示すことによつて、それが直ちに、善知識そのものの意義の重要性を知らしむる方法でもあるのである。勿論、この『經』全體が内容的には菩薩道を説くのであるから、親近善知識の強調は各所に見られることは當然であるが、特に「入法界品」に於いては、具體的に一貫して説かれている。舊譯の『經』文には「善哉善哉。善男子。乃能發<sub>ニ</sub>阿耨多羅三藐三菩提心<sub>ニ</sub>。求<sub>ニ</sub>善知識<sub>ニ</sub>親<sub>ニ</sub>近善知識<sub>ニ</sub>問<sub>ニ</sub>菩薩行<sub>ニ</sub>求<sub>ニ</sub>菩薩行<sub>ニ</sub>。善男子。是爲<sub>ニ</sub>菩薩第一之藏<sub>ニ</sub>。具<sub>ニ</sub>一切智<sub>ニ</sub>。所謂應<sub>下</sub>求<sub>ニ</sub>善知識<sub>ニ</sub>、親近恭敬、一心供養而無<sub>ニ</sub>厭足<sub>ニ</sub>、問<sub>ニ</sub>菩薩行<sub>ニ</sub>。」と言ひ、善財童子の最初の善知識たる文殊師利菩薩が指南の最初の教えである。この語は、善財童子の求道を貫ぬかした根本精神であり、善財の善知識歴訪が如何に進展しても、常にこの立場から離れないところのものである。「善知識を求め、善知識に親近し、善知識を恭敬し供養する」ことこそ、菩薩道を成ぜしむる根本的態度が見られる。「入法界品」はまことにこの事を特に強調する。善知識

を限りなく歴訪して菩薩行を問うところ、そこにのみ菩薩行の進展がある。善知識に親近し、恭敬し、供養することを忘れ、怠たる時、菩薩行は直ちに退轉することを意味する。従つて強い志願に燃えて發菩提心するも、その發心自體が、善知識に親近供養することを離れては成立しないことになる。發心を無限に開發するものは善知識であるとも言ひ得る。

善財童子の現に立つ求道心の前景には、限りなく善知識が現われる。文殊師利菩薩は、具體的には善財童子に普賢行を求めよ、と教えるのであるが、その普賢行もまた善知識を訪ねること以外には無いのである。後に善財童子が彌勒菩薩の下に到り、その教えを受けた時、彌勒菩薩は發菩提心の無盡の功德を廣説し、その教説は全く發心のみに集中されている。二百十八句の實に多量の諸句は、ひとえに發心の功德を讀めることに盡されている。全く彌勒菩薩は發心強調の權化として現われている感がある。そこに於いて善知識に言及している言葉を挙げれば、

①「善哉善哉童子。乃能發阿耨多羅三藐三菩提心。」

專求一切佛法。饒益一切世間。救護一切衆生。善男子。汝得善利。人身壽命。值遇諸佛。得見文殊師

利大善知識。汝爲法器。善根潤澤。長清白法。淨勝欲性。爲善知識之所總攝。諸佛護念。何以故。菩提心者。則爲一切諸佛種子。能生一切諸佛法。」

「菩提心者。則爲善知識。離一切惡諸恐怖故。」

「菩提心者。則爲善友。一度脫無量生死難故。」

舊譯に於いてこれらの『經』文を見るに、善知識、善友が菩薩の求道、聞法に如何に重要な意味を持つかが自ずから明了となるのである。

親近善知識が「入法界品」を貫いている精神であると共に、ここでもまた前述の宿世の修因が極めて重要な意味を示している。善財童子が歴訪した諸善知識は、自己の宿世の修因を表白している。即ち所謂五十三の諸善知識は、何づれも自分行と勝進行とを以て、求道者善財に自己の所得の法門を語るのであるが、その自分行に於いて、善知識は各々自己の宿世物語を開陳し、それぞれの深い宿世の善友に關して物語るのである。このことはまた、善財童子の求道が一層親近善知識の必要なことを明示していると言えるのである。

### 三

善知識に親近することは、所謂惡知識を遠離せしめ

る。「賢首菩薩品」に於いては信徳の廣大なることを力説すると共に、信堅固なれば、惡知識を離れることを得ると説かれている。

「若信<sup>⑧</sup>恭敬清淨僧。」

則信堅固不可<sup>レ</sup>壞。

若信堅固不可<sup>レ</sup>壞。

彼人信力不可<sup>レ</sup>動。

若信堅固不可<sup>レ</sup>動。

諸根明利悉清淨。

若根明利悉清淨。

則離一切惡知識。

若能親近善知識。

則修無量諸功德。」

「舊譯」

このように惡知識を遠離することが、同時に善知識に親近することとなるのである。求道開法に於いて惡知識を遠離し、善知識に親近しても、更に求道者にはそこから大きな危機が孕らまれていることに留意しなければならぬ。親近善知識の自己肯定がいつしか執の失を犯すことになる。内面的にはこのことが最も警戒を要することになる。求道に於いて屢々この過失を犯し、無意識的に内省を怠ることが看過されてならないのである。この執の失に關して、法藏が『探玄記』卷第十八に於いて極めて入念に解明を與えていることは特に眼を向ける必要がある。而して如何なる時代に於いてもこの問題は生きた課題を提起することを認めざるを得ない。法藏はこの

問題を、善財童子が廣く多處を歴て善友を求めよと指南した文殊の深い意圖を追求し、その意は多端であるが、大略して八種の意味あることを述べ、その中に鋭く執の失を取り上げている。從つてこの重要な解釋を順次に考察することしよう。八種とは、一、爲軌範<sup>⑨</sup>故。二、行緣勝故。三、破見慢<sup>⑩</sup>故。四、離細魔<sup>⑪</sup>故。五、寄成行<sup>⑫</sup>故。六、寄現位<sup>⑬</sup>故。七、顯深廣<sup>⑭</sup>故である。多處を求める意義が如何なるものであるかは、この八種を以てして極めて要を得ていると思う。しかも法藏自らが八種の各々に解説を試みていることを注意して見る必要がある。法藏の善知識觀は、ここに結集していると見てよいかと思う。

一、軌範と爲すが故に。

善財は求法の妙規を成じ、善友は説法の良規を顯す。諸の衆生をして、此の躡を軌として行を成ぜしむ。則ち佛華は常に敷け、廣嚴恆に著るる者なり。

二、行緣勝るるが故に。

成行の要は良友を以て先と爲さざることなし。阿難の言へるが如し。「善知識は是れ半ばの梵行なり。佛の言は爾らず。是れ全の梵行なり」と。

『經』に云く。「阿闍世王、若し耆婆の語を用ひず

んば、來月七日に定んで地獄に墮せん。是の故に我言ふ。「道を得るの來、善友に若くは莫し」と。

又、『智論』に説かく。「迦延は應に地獄に入るべからしめ、弟子は聖果を得」等と。

又、『經』に言はく。「善知識は是れ大因縁なり。能く汝等をして當に佛を見ることを得しむ」と。

又、下の文に云はく。「善知識は是れ奇特の法」等と。三、見慢を破するが故に。

善財等の新學の菩薩をして、自らの憍慢と及び執見とを破せしむるが故に。其れをして法を求めしむるに、男女、長幼、貴賤、道俗、尊卑、神天、外道を簡ばず。但し、身を卑うし、屈辱して務めて法を得ることを存す。『經』に云はく。「知法の者あらば、若しは老、若しは少、應當に恭敬して、猶諸天の帝釋に奉事するが如くすべし」と。

四、細魔を離るるが故に。  
若し人を封じて一を守らば、直に後行増さざるのみに非ず。亦乃し執著の失り成ずるが故に。『離世間品』の十種の魔中に、善知識魔有り。彼に於て著心を生ずるが故に著を離れて更に進修す。

五、成行に寄するが故に。

問ふ。「この善財、一法門を得れば、修行を成ずるに足れり。何んが修習することを爲し、乃し遊歴して厭くこと無きや。」答ふ。「即ち此れ廣く求むるは、菩薩の事、善友の行、及び求法の行を成就す。縦ひ法を得ざれども、此れ已に行を成ず。況んや皆彼の未曾有の法を得て、慧眼開明して眞法界を見るをや。」以下略。

六、位を寄顯するが故に。

謂はく。廣く善友に寄せて信等の五位の差別の相を顯す。文處見つべし。問ふ。「何が故に善財は、佛の所に向ひて法を求めざるや。」答ふ。「因行未だ圓かならざれば、未だ佛に至らざることを表すが故に佛の所に到らず。」

七、深廣なることを顯すが故に。

謂はく。佛法の廣くして無邊なることを表顯するが故に。諸の知識は位法雲を極むること有りと雖も、猶我唯此一法門を知れりと稱す。豈能く諸の大菩薩の無量の行相を了知せんや。佛法の深くして底無きを表顯するが故に、善財縱ひ位は登地に至るとも猶ほ而も「我未だ知らず、云何が菩薩の行、菩薩の道」等と言ふが如し。況んや今具縛少善の凡夫、微しく所解有れ

ば便ち自ら一切の佛法を解りと謂ひて、慢を起し、自ら高ぶり、他人を陵蔑するをや。知らずして便ち經論を臆斷して自ら陥り、人を陥ること有らば、何んぞ悲しみの甚だしき。」

八、緣起を顯すが故に。

善財、善友と同じく一緣起を成ず、能入所入二相無きを以ての故に。是の故に、善友の外の善財無きが故に。一即一切を彰はし、善財は諸位を歷ることを明す。善財の外の善友無きが故に一即一切を顯し、多位の成ずること、善財に在ることを明すなり。是に由りて卷舒自在、相融無碍なること、之を思ふて知んぬべし。」以上大略八種の説明は『經』の善知識歴訪の意義を要約して明了ならしむると共に、善知識が如何なる意味を持つものであるかを、深く知らしめてくれるものがある。

此の中、善知識を尊重しながらも、善知識に親近する求道者自身に強く反省を求むるものとして、第三の破見慢と第四の離細魔とがある。特に法蔵のこの見解は見逃し得ない重要なことと思われる。第三の破見慢については、憍慢と執見との二つが挙げられている。求道、聞法は憍慢と執見とが、必ず内心に起るものである。法を少

しく知ることは、無意識的にその法を執じ易く、それをふりかざす傾向を生ずる。菩薩道に於いて法執を限りなく離れしめんとするのはそのためである。所謂、所知障である。自から意識せずして執見に陥いる。執見は他に對して、高慢心を起さしむ。知ることが無意識的に自己を害し、同時に他をも害するのである。従つて憍慢と執見とは、菩薩道の停滯退轉を意味する。「身を卑ふし、屈辱して務めて法を得る」ことこそ、求道聞法の要であり、如何なる時も、謙敬の心もて問うことが、自己の憍慢と執見とを打破して進修することなのである。

更に第四の細魔を離るるが故にということは、第三の見慢が法を執することであるに對し、特に人を執することとを戒しめたものである。實際求道に於いては、屢々人を執するの失に陥り易い。そこに危険が存する。この危険は求道者にとつては、最も深く反省を要することと言うべきである。この點に殊に留意して法蔵が「若し人を封じて一を守らば、直に後行増さざるのみに非ず。亦乃し執著の失を成ずるが故に」と言っていることは、まことに耳を傾けしめるものがある。殊にこの『經』の「離世間品」に説く十種魔の中に、善知識魔なるものがそれに當ることを指摘していることは極めて適切なことと言

い得るのである。法蔵が指摘している十種魔とは一體如何なるものであろうか。そこに言われる善知識魔とは、またどのような魔であらうか。舊譯において見るに、十種魔は次のように説かれている。

- 一、五陰魔、五陰に貪著するが故に。
- 二、煩惱魔、煩惱染するが故に。
- 三、業魔、能く障碍するが故に。
- 四、心魔、自ら憍慢なるが故に。
- 五、死魔、受生を離るが故に。
- 七、失<sub>ニ</sub>善根<sub>一</sub>魔、心に悔ひざるが故に。
- 九、善知識魔、彼に於いて著心を生ずるが故に。
- 十、不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>菩提正法<sub>一</sub>魔、諸の大願を出生すること能はざるが故に。

十種魔はこのように説かれているが、『經』文にはその後、「應に方便して、速かに之を遠離すべし」と説いている。この中の善知識魔こそ特に法蔵が注目したものと云えよう。十種魔は新舊兩譯異同なく、同様に説かれており、ただ第十が新譯では菩提法智魔となつてゐるのみで、他は全部等しい。従つて共に善知識魔を説いている。澄觀の『華嚴經疏』卷第五三には「初魔體、後魔因」とし、更に「身は道器と爲る。體は佛と同じ。豈即

ち是れ魔蘊なりや」と疑問を出し、それに答えて「魔の名は特に取著に由る。下九例爾り」と説明しているを見る。正しくここに言う「魔」は取著、貪著の執を指している。特に法蔵は第九善知識魔に意を注ぎ、善知識の人に執著することが魔であることを見出ししている。従つてこれは善知識その人というよりも、求道者が善知識の人に執われを持つところに、「魔」と言われる理由が存する。求道者が善知識を眞に善知識たらしめなくなることを目指すのである。「彼に於て著心を生ずるが故に、著を離れて更に進修す」と言つてゐることは、人に執すれば菩薩道の進展が停滯することを言つたのである。更にこの法蔵の説を一步進めて見れば、自己の求道の退轉と共に、佛教教團の和合をも亂すおそれがあるのである。對自のみならず、それは對他的にも障りとなることが反省されねばならない。しかし法蔵はこの善知識魔を『探玄記』に就いて特に「細魔」と呼んでいることは、注目すべきことと言わねばならない。善知識は本來惡知識に對しての言著である。あくまでよき意味を持つものである。然るにそれが「魔」と言われることに深い省察が行われ、別を以て「細魔」の語を用いたことが想像される。ここに細心な顧慮が拂われていることを見逃し得な



いのである。

#### 四

前述の法藏の説としての善財多處に善友を求めた八種の意の中、第二、「行緣勝るるが故に」として、その説明に、「成行の要は、良友を以て先と爲さざることなし」と言っていることは、最も理解し易いことであり、多くの『經』文を擧げて、實例を以て證明を與えているを見る。殊に『涅槃經』に於ける阿闍世と耆婆との關係を取り上げていることは、極めて適當なことと思う。即ち成道、得道の要として、善友を先と爲すということは、この實例が最も感銘を與えるものと言えよう。今、『涅槃經』の『經』文を見るに、

「王語耆婆。若使如來審如是者。明當選擇良日吉星。然後乃往。耆婆白王。大王。如來法中無有選擇良日吉星。大王。如重病病人猶不看日時節吉凶。惟求良醫。王今病重求佛良醫。不應選擇良時好日。大王。如栴檀火及伊蘭火。二俱燒相無有異也。吉日凶日亦復如是。若倒佛所俱得滅罪。惟願大王今日速往。」〔北本卷二十〕

この耆婆の勧誘は、まことに眞實且つ巧妙な言葉を以

てしている。ここに善友の妙規を見ることが出来る。阿闍世王の得道の緣は、善友耆婆の誠心なくして得られなかつたであらう。それ故にやがて耆婆に導かれて佛所に訪ね來た阿闍世に對して、佛は次のように大衆に告げられたのである。

「其時佛告諸大衆言。一切衆生爲阿耨多羅三藐三菩提。近因緣者莫先善友。何以故。阿闍世王若不隨順耆婆語者。來月七日必定命終墮阿鼻獄。是故近因莫若善友。」〔同上〕

發心の爲の近因緣は、善友より先なるは無いのである。阿闍世は善友耆婆の善き指南なくして得道の道は開かれなかつたであらう。善財童子また文殊の指南なくして菩薩道は開顯されなかつたであらう。近因緣を得る事緣は異なるも、善友が成行、得道の近因緣たることに變りはないのである。

善財多處經歷について八種の意を明らかにした法藏の説には、以上特に問題とした事の他になお多くの問題を示しているが、われわれに特別な關心を起さしむるものは大略述べることが出来たと思う。ただ『華嚴經』を詳細に検討し、隨處に表われている善知識の意義を追求すればなお限り無きものがある。ここでは、法藏が特に強

調しているかに思われる箇所を指摘して、その意を汲むことに努めたのである。

まことに善知識は善友であり良友である。特に「友」と言われる意味は深く且つ廣いものがあると思う。それは道の導師であると共に同志、同行者でもある。それは同時に菩薩心でもあると言えよう。

## 五

菩薩心が眞の友の心として言い得ることは「不請の友」ということに於いて知ることが出来る。菩薩が善友として衆生に對する時、それは不請の友となる。この不請の友に關しては、大乘經典の中、『維摩經』『勝鬘經』等によくその意を説いているを見る。今、聖德太子の『義疏』によつて、その意味を求めて見るに、

「衆人不請友而安之者。菩薩慈悲不待物請之故。」

言不請。教化衆生同證極果。故云友而安之。摩訶師云。理接眞友不待請護如慈母之赴嬰兒。『維摩經義疏 佛國品』

また

④「友是相救爲義。然請而後救非眞友。故云作不請之友。菩薩化物如慈母就嬰兒。故云爲世法母。」

『勝鬘經義疏 攝受正法章』

この『太子義疏』の二文は、何れも不請の友の御解釋であるが、菩薩外化の悲心は、自から衆生に對して働きかけ、請を待たずして救うと説明せられている。それが眞友である。このように善友は對衆生という立場に於いて、不請の友の意味が存し、それはそのまま菩薩の慈悲心なのである。

『華嚴經』に見られる善知識は求道的立場からして、法藏によつて深く追求され説明されたのであるが、今ここに菩薩外化の立場から不請の友としての善友、眞友が見られることを合せ考えさせられるのである。ここでは主として『華嚴經』の『經』文により、法藏が善知識を如何様に解明したかに重點を置いて探究したのであるが、更に善知識觀の問題は、佛教の歴史上に於いて重要な意味の展開を見たことは言うまでもない。今は局限して法藏の善知識觀の主要問題のみに止めおくのである。

## 註

- ① 卷一、(大正藏九・三九五中)
- ② 卷一、(大正藏一〇・二上)
- ③ 卷四四、(大正藏九・六七六中)
- ④ 卷六〇、(大正藏一〇・三一九中)
- ⑤ 卷二、(大正藏三五・一三三中)

- ⑥ 卷四六、(大正藏九・六八九中)
- ⑦ 卷五九、(大正藏九・七七五中以下)
- ⑧ 卷六、(大正藏九・四三三中)
- ⑨ 卷一八、(大正藏三五・四五四下―五下)
- ⑩ 卷四二、(大正藏九・六六三上)

- ⑪ 卷五三、(大正藏三五・九〇三下)
- ⑫ 卷二〇、(大正藏一二・四八二中以下)
- ⑬ 昭和會本、(六丁右)
- ⑭ 昭和會本、(二一丁右)